

## サファヴィー朝宮廷の女性たち

—近世イスラーム王朝女性史研究の展望—

後藤 裕加子

### 一 イスラーム女性史研究の進展

イスラームは男女の差異を強く認識する考えをもち、男女分離の習慣も現在にいたるまで各地で残されている。外部からはときに「異質」とみなされるこの特徴は、社会学や人類学などの分野において女性への関心の高さにつながった。しかし、こと近代以前となると、女性の存在はながらく「不可視」な存在とされてきた。

Gavin R. G. Hambly は、イスラーム女性史研究が進展しなかった一因にヨーロッパのオリエンタリストの伝統も指摘する。彼によれば、中東の女性史研究のバイオニアはトルコ生まれのアラブ人で、シカゴ大学東洋学研究所で初の女性教授となった Nabia Abou がある。彼女は一九四〇年代にイスラーム以前やイスラーム初期に政治的影響力行使した女性に関する研究を著した。スーフィズムに女性が果たした役割の重要性については、早い段階から碩学 Ignaz Goldzieher や Annemarie Schimmel が明らかにしており、また Goldzieher がハディースの伝達や教育における女性の役割を指摘したことが、女性の教育についての研究をうながすことになった。しかし二〇世紀の後半には、しばらくの間 Lambton (1988)

の、セルジューク朝とイル・ハーン朝の女性の政治や経済上の役割に関する一章が中世のムスリム女性を主に取り上げた唯一の専論にとどまった [Hamblly (1998) , 3-7, 19-20]<sup>(1)</sup>。

イスラーム女性史研究が進展を見せ始めるのは一九九〇年代になってからで、まずオスマン朝のハレム女性の政治的影響力を考察した Peirce (1994) が出版された。イスラーム以前から一九世紀までの各地の支配階級の女性に焦点をあてた二三の論考を収録した Hamblly (1998) は、イスラーム女性史研究の入門書となっている。ペルシア語文化圏に関していえば、同書にも寄稿している Maria Szuppe のサファヴィー朝前期の王族の婚姻関係と女性の教育・政治的影響力について明らかにした前後編 Szuppe (1994) (1995) や、王女バリー・ハーン・ハヌムに焦点をあてた Gholsorkhi (1995)、王族や上層階級の女性の宗教寄進・経済活動について扱った Zainebaf-Shahr (1998) などが発表されたのも一九九〇年代の半ばである。二〇〇〇年代になると各種文書史料を用いた研究が増え、女性史研究のテーマも多様化した<sup>(2)</sup>。

近代以前のペルシア語文化圏の女性を扱った研究については、Szuppe (2003) を含む八編の論文を収録する Nasihat & Beck (2003) と同じ年に、一三世紀から一四世紀にかけてのモンゴル支配期を扱った単著 Quade-Reutter (2003) が出版された。モンゴル支配末期にユーラシアを旅したイブン・バットウータが述べるように「そもそもトルコ人やタタル人の間では、女性が特別に高い地位を占めて」いたことが彼女たちの政治活動を可能にし、ひいては彼女たちの研究上の「可視化」を容易にしている<sup>(3)</sup>。

サファヴィー朝時代(一五〇一—一七二二)の女性史に的を絞ると、一連の研究の筆頭にあげられるのが Szuppe の業績である。しかし同時代の近世イスラーム王朝のオスマン朝の女性史研究に比べると、サファヴィー朝時代の女性史研究の進展は著しいとはいえない。これは文書史料が豊富なオスマン朝と異なり、史料上の制約が大きいことに一因がある。サファヴィー朝下の女性の諸相を概観するような研究は、ヨーロッパ人旅行記の記述を利用して主にサファヴィー朝後期を対象とした Hamblly (1998) 所収の Ferrier (1998) 、および後述する Mathee (2011) があるのみである。

## 二 サファヴィー王家の女性たち

女性たちが自身が残した記録がなく、男女の接触到に制約があつた状況では、名前やある程度の活動履歴をたどることが可能な女性には支配エリート層の女性に限られる。ここからは、先行研究の成果を整理しながら、サファヴィー朝王家の女性成員および彼女たちの居場所であつた宮廷のハレムについて概観していく<sup>5)</sup>。

サファヴィー朝前期には王家の女性たちはシャアの家族として積極的に政治的影響力を行使した。第二代タフマースプ一世（在位一五二四—一五七六）は、幼少期は母タージュルー・ハースム、壮年期は姉妹シャーザーダ・スルターヌム、晩年は娘バリー・ハーン・ハースムを私的な政治顧問とした。彼女の姉妹サイナブ・ベグムも甥アッバース一世を後見し、サファイー一世の時代まで政策決定に大きな影響力を持ち続けた<sup>6)</sup>。彼女たちが政治の場で表立って活躍できた理由として、サファヴィー朝が定住民のイラン・イスラーム文化と比べて女性の社会・政治活動や男系・母系の両方の血統を重視するモンゴル・トルコ系遊牧民の習慣や考え方を強く受け継いでいたことが挙げられる [Szuppe (2003), 141]。一方、サファヴィー王家は王朝成立を軍事面から支えたトルコ系遊牧民の教団信者集団キジルバシユの勢力抑制を図つていくが、これは同王家の婚姻政策にも反映され、王族女性の血統や女性に対する考えの変化にもつながっていく。サファヴィー朝では初代イスマーイール一世（在位一五〇一—一五二四）時代は主にキジルバシユの有力者との間で婚姻関係が結ばれたが、つづくタフマースプ一世時代にはキジルバシユの勢力を抑制するために地方王朝や神秘主義教団との婚姻関係が強化された。第五代アッバース一世（在位一五八七—一六二九）はイラン系地方王朝の王族マルアシー家のハイル・アルニサー・ベグムを母とした<sup>7)</sup>。一方、タフマースプ一世は主に軍事力を担うギジルバシユ、官僚層を構成するタジクに次ぐ第三勢力としてチュルクス人やグルジア人などのコーカサス出身者を導入したため、ハレム入りした女性もいた。父

タフマースブ一世の政治顧問として政治的影響力を行使したパリー・ハーン・ハースムも、母はチェルケス系であった。<sup>(8)</sup>

サファヴィー朝はアッバース一世時代を境として、おおまかに前期と後期に分けられる。諸改革を推進して中央集権体制を確立したことで知られるアッバース一世は、祖父タフマースブ一世が始めたコーカサス出身のグラーム（王の奴隷）を軍人や官僚として登用する政策を継承し、キジルバシユ勢力の抑制に成功した。この政策によって支配階級の構造が大きく変容したのにもない、宮廷のハレムが変容したことも確認できる。ハレムの女性成員は、購入や捕虜、臣従する有力者から贈られるグルジア系やチェルケス系などコーカサス出身の女奴隷で占められていくようになった。アッバース一世以降のシャーがキジルバシユ家系出身の女性を娶った事例は史料上確認されない。<sup>(9)</sup> また彼らの母がコーカサス系の女性であることから、<sup>(10)</sup> ハレムからキジルバシユの血統が徹底排除され、コーカサス系勢力が拡大したことが明らかとなる。

サファヴィー朝宮廷のハレムの変容を決定的にした出来事は、アッバース一世が首都イスファハーンから遠く離れた冬の滞在地マザーンダラーンで死去した後起こった。アッバース一世の息子たちはすでに亡くなっているか、父王によって盲目にされており、宮廷関係者のあいだで後継者をめぐる駆け引きが生じた。<sup>(11)</sup> 首都イスファハーンにあつて急ぎ即位した孫のサフイー一世（在位一六二九—一六四二）は、一六三二年にアッバース一世の娘の息子たちを含む王子たちやその両親たちを殺害した。<sup>(12)</sup> サファヴィー朝では女性王族の生んだ男子もミールザー（王子）と呼ばれており、理念上は王位継承権を持つと考えられていたが、この殺害事件以後、王位継承権は男系に制限された [Babayān (1993), 93-6, 100; Babayān (1998), 356-7; ブロー (2012), 354]。このような事件もあり、サファヴィー朝後期にはサフイー一世の娘マルヤム・ベグムのような一部の例外を除いてシャーの娘や姉妹の政治参加は後退し、一方で母親の政治への影響力が増すことになったとされる。母後の権力が増した理由としては、キジルバシユの有力者が王子のララ（後見）に任命されるという制度は維持されたものの、王子が地方に派遣されることがなくなり、王子たちがハレムで母親のもとで育てられることに

なったことなどが挙げられている [Babayan (1993), 100; Szuppe (1995), 102]。

このようなハレムの女性構成員やその活動などの変容から、Szuppe はサファヴィー朝の女性がもつとも可視化され、社会的に活動的であったのは一六世紀であるとする。また Babayan (1998) および Mardavi (1998) はシーア派ウラマーの著作の分析から、シーア派の正統教義の影響力の増加とともに一七世紀にはそれまで自由を謳歌した女性の周縁化・ハレムへの隔離が進んだと説明する。それに対して Matthee (2011) は女性のハレムへの隔離が女性の権力の制限を意味しなかったとし [Matthee (2011), 97-100]、表に出て自らを「可視化」した女性たちを例証していく。ただし特定の人物を取り上げて、その社会的・経済的活動にまで踏み込んだ考察は行われていない。

### 三 サファヴィー朝後期のハレム

宮廷女性のハレムへの隔離と女性の活動の制限との関係を考えるためには、空間や組織としてのハレムについて検討する必要がある。オスマン朝のトプカプ宮殿に代表されるように、近世イスラーム王朝は王宮内部に大規模なハレムの建物を持った。移動の習慣を持つトルコ・モンゴル系遊牧民が建設した王朝の都市定住化と王宮建設のプロセスについてはまだ不明な点が多いが、サファヴィー朝では、先駆王朝のアク・コヌル朝から受け継いだ首都タブリーズの王宮地区にハレムの建物がすでにあつたことが確認される。イスマール一世の移動時の滞在地ホイにもハレムが設けられた [平野 (2000), 10-1]。タフマースプ一世がタブリーズからカズウィーンに遷都した時も、新しい王宮地区の庭園内にハレムの建物を設けている<sup>13)</sup>。ただし遊牧系の風習を長く保持したサファヴィー朝では、首都があってもシャーは移動をするのが常で、後期にいたってもハレムはシャーの移動に同行した [フロー (2012), 273; 後藤 (2014), 46]。オスマン朝との間にしばしば戦闘が発生した前期には、有事に備えてハレムがシャーと別行動を取り、地方都市には滞在用の建物ハレムサラ

イが設けられていた「平野（2000）参照」。また、パリー・ハーン・ハヌムとザイナブ・ベクム姉妹のように、未婚の女性王族が私邸に住むこともあった<sup>14</sup>。ハレムは固定された隔離空間に限定されるものではなかった。

ハレムは建物のみを意味するのではなく、そこに居住または従事する男女からなる組織の総体でもあるが、サファヴィー朝のハレムについての専論はいまのところない。サファヴィー朝でハレムの巨大化・組織化が進むのは、上述のようにアッバース一世の時代以降である。一六世紀後半のカズウィーン時代のハレムの成員は四〇〇人以上の女性、一〇〇人の宦官、二〇〇人の侍従からなっていた「平野（2000）、10」。アッバース一世時代には女性の数は一説では三〇〇名[Floor（2007）、174]、他説では四〇〇名から五〇〇名[Falsafi（1967）、214; ブロー（2012）、271]<sup>15</sup>、第七代アッバース二世時代（一六四二—一六六六）は三〇〇名から四〇〇名[Floor（2007）、175]、第八代スレイマーン時代（一六六六—一六九四）は五〇〇名以上のキリスト教徒女性があり、第九代スルタン・フサイン時代（一六九四—一七二二）にはハレムの維持は国家の重荷になっていたという<sup>16</sup>。侍従や宦官という男性従事者を除くと、ハレムは女性、貴顕の子供達、女奴隷（*kantzak*）の三集団からなり、シャーの家族の女性にはその地位に従って異なった称号がつけられた。すなわち、王女はベグム（*begum*）、高位のシャーの夫人はハヌム（*khanum*）、より低い身分の夫人はハートウーン（*khatun*）で、頂点に君臨する女性はただベグムとのみ呼ばれた[Blake（1999）、70; Falsafi（1967）、216]<sup>18</sup>。ハレムは宮廷と同様の役職と機能を有する女性がいるともあり、働く女性の職務は多岐にわたったようである。女性の宗教者や医療従事者もいることから、ムスリム女性も働いていたと思われる。なお、ハレムの肥大化やハレムでの王子の養育はしばしば研究者からサファヴィー朝衰退の一因とみなされるが「ブロー（2012）、352」、財政分析などではなく、ヨーロッパ人の記述にもとづく印象論に留まっている。

ハレムの女性に奉仕する男性成員の組織は、叙述史料やサファヴィー朝末期に著された行政便覧からより詳細な再構成が可能である。行政便覧のひとつ「*Dasfūr al-Mulūk*」の英訳に Floor（2007）がつけた解説に依拠しながら概観していく。ハ

レムはハレムの侍従 (*ishik-āqāsī-yi ħaram*) の長 (*ishik-āqāsī-bāshī-yi ħaram*) の監督下に置かれる。ハレムの侍従および侍従長の存在はすでにタフマースプ一世時代に確認される [平野 (2000) , 7, 10, 20; Floor (2007) , 175]。ハレムの侍従長はディーワーン (官邸) の表向き (*brīm*) の諸儀礼の総括責任者であるディーワーンの侍従長 (*ishik-āqāsī-bāshī-yi dīwān-i ālā*) と協力して宮廷の内向き (*andarūn*) の諸業務にあたった。どちらもキジルバシユのアミールが就く官職であったが、通常後者がハーンの称号をもつのに対して称号は格下のベグであり、地位は高くなかった。また年配者が任命され、サフィー時代からは特定の部族から選ばれた<sup>(10)</sup>。ハレムがシャーの移動に同行するときにはハレムの侍従長がその守護に責を負い、コルチ (近衛) が護衛した [平野 (2000) , 20; Floor (2007) , 173-4]。

ハレムで働く宦官は、一六〇〇年頃にはその数は一〇〇名ほど<sup>(11)</sup>、もともと黒人だけであった。アッバース一世時代に一〇〇名のグルジア人の白人宦官が導入され、黒人宦官長 (*trsh-i saftd-i ħaram*) がハレムの門から内側、白人宦官長 (*yuz-bāshī*) がハレムの門の外を管轄した。外部からの用事はハレムの侍従長から黒人宦官長を通してシャーやハレムの女性に伝えられた。同じ頃に黒人宦官長は二役に分かれ、上位の黒人宦官長 (*trsh-i saftd-i jilaw*) は常にシャーの側に仕えるようになった。シャーやハレムの留守中、各部門の役人は黒人宦官長の指示に従うこととされた。政務への正式な参加は認められなかったが、シャーやハレムの女性との近さから、宦官は時に政治的に絶大な影響力を持った [Floor (2007) , 176-9; プロー (2012) , 275-7]。<sup>(12)</sup>

ハレムとの関係は明確ではないが、女奴隷が配属された部署が宮廷内にある。マシユアル・ハーナ (*mash'al-ḥana*) と呼ばれる照明や暖房に関わる部署の長 (*mash'al-dār-bāshī*) は、音楽家の親方 (*chalīch-bāshī*) を配下に置いていた。親方が統括した音楽家のなかには女性の踊り子たちが含まれた<sup>(13)</sup>。イスファハーンのチェヘル・ソトウーン宮殿内部の壁画のシャーの宴会図に描かれているように、彼女たちは宮廷で開催される盛大な宴会で音楽の演奏にあわせてパフォーマンスを披露し、外国からの使節の出迎えに出た [Matthee (2011) , 102-3]。彼女たちの出自は明らかではないが、多くはコー



カサス出身のキリスト教徒女性で、ハレム組織のヒエラルヒー下部に属したものと思われる。

ハレムには常に新しい女性が供給される。ハレム構成員の数を抑制するためにも、出世が望めない女性たちはハレムから出されることになる。シャーの愛顧を受けた女性であれば、配下の男性と娶わせられるが [Ferrier (1998) , 400; Floor (2007) , 174; ブロー (2012) , 272]、これは恵まれた方であろう。そのような「恩恵」に浴さない女奴隷たちは、ハレムを出た後にどのような生活を送ったのであろうか。そもそも音楽や踊りはイスラーム世界では評価が低く、踊り子や歌手は同時に売春婦を生業とした。シャルダンがサファヴィー朝時代のイスファハーンには税金を支払って公的に認められた売春宿が一二〇〇から一四〇〇あったという。これは誇張としても、イスファハーンに多くの売春宿があったことは間違いなく、また恐らく出自や生業の共通性から考えても、ハレムと市内の売春宿が相互に供給源として関連性があったとしても不自然ではない。高官には自身の音楽家と踊り子を所有するものもいたようである。シャルダン自身がイスファハーン滞在中に二年間住んだ建物は高級娼婦の邸宅で、もともとは高官が所有した贅沢な邸宅であった。近所にも女主人とグルジア人の女奴隷たちが住む、同じような家があったという [Ferrier (1998) , 393-4]。遠くコーカサスの山岳地帯から異境の地に連れてこられた女性たちの人生は楽なものではなかったはずだが、なかには市井でたくましく生き抜いた女性もいたかもしれない。

## おわりに

最後にサファヴィー朝時代の女性史研究の課題を二点提示したい。第一にハレムが変容したサファヴィー朝後期の宮廷女性の活動歴の整理、次に彼女たちが属したハレム組織のより実証的な検討である。オスマン朝のトップカプ宮殿は伝統的なイスラーム王朝の宮殿で最もよく保存されたものであったため、ハレムの典型とみられてきた [Hamblly (1998) , 430]。



確かにサファヴィー朝のハレムの制度にはオスマン朝のハレム制度との類似点が多く見いだせるものの、上述したハレムの移動のような明らかな相違点も観察される。女性のハレムへの隔離が活動の制限につながったのかどうかの検討にも、ハレム組織やその制度を明らかにし、これを彼女たちの活動と関連づける必要がある。

まずは比較的研究がしやすい宮廷の女性に関する課題を示したが、写本絵画に描かれた女性像や、行政便覧やワクフ文書などを利用して社会経済面の考察の深化をはかり、またこれらの史料を叙述史料と組み合わせることによって、対象とする女性の幅を広げることも次なる課題となろう。<sup>(2)</sup> ペルシア語文化圏の女性史研究の進展は、近世イスラーム王朝下に生きる女性の様相を一元的にとらえる弊害を解消し、女性たちの人生の多様性を知ることにつながるものと考えてる。

## 主な研究文献

- Babaie, Sussan; Babayan, Kathryn; Baghdiantz-McCabe, Ina; Farhad, Massumeh (2004) *Slaves of the Shah: New Elites of Safavid Iran*. Tauris.
- Babayan, Kathryn (1993) *The Waning of the Qizilbash: The Spiritual and the Temporal in Seventeenth Century Iran*, PhD thesis, Princeton.
- (1998) “The ‘Aqā'id al-Nisā’, A Glimpse at Šafavid Women in Local Isfahani Culture” in Hamblly, G. R. G. (ed.), *Women in the Medieval Islamic World*, 349-81.
- Bayānī, Shūrīn (1971) “Zan dar Tārīkh-i Baihaq” in *Yādāma-yi Abū al-Faḍl Baihaqī*, Mashhad, 68-90.
- (1974) *Zan dar Irān-i 'asr-i Moghul*, Tehran.
- Blake, Stephan P. (1998) “Contributors to the Urban Landscape: Women Builders in Šafavid Isfahan and Mughal Shahjahanabad” in Hamblly, G. R. G. (ed.), *Women in the Medieval Islamic World*, 407-28.
- (1999) *Half the World: The Social Architecture of Safavid Isfahan, 1590-1722*. Mazda Publishers, Costa Mesa.
- Broadbridge, Anne F. (2018) *Women and the Making of the Mongol Empire*. Cambridge University Press, Cambridge.
- De Nicola, Bruno (2017) *Women in Mongol Iran: The Khātuns, 1206-1335*. Edinburgh University Press, Edinburgh.
- Falsafī, Naṣr Allāh (1967) *Zindagānī-yi Shāh 'Abbās-i Awval*, II, Tehran.
- Ferrier, Ronald W. (1998) “Women in Šafavid Iran: The Evidence of European Travellers” in Hamblly, G. R. G. (ed.), *Women in the Medieval*

*Islamic World*, 383-406.

Floor, Willem. Faghfoory, Mohammad H. (tr. & commentary) (2007) *Dastur al-Muluk: A Safavid State Manual by Mohammad Rafi' al-Din Ansari*, Mazda Publishers, Costa Mesa.

Chereghlou, Kioumars (2016) "Zaynab Begum", in *Encyclopaedia Iranica* (online) .

Gholisorkhi, Shohle (1995) "Pari Khan Khanom: A Masterful Safavid Princess", in *Iranian Studies* 28:3-4, 143-56.

Hamby, Gavin R. G. (ed.) (1998) *Women in the Medieval Islamic World*, St. Martin's Press, New York.

Jennings, Ronald (1975) "Women in Early 17th Century Ottoman Judicial Records: The Sharia Court of Anatolia Kayseri" in *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 18:1, 53-114.

Lambton, Ann K. S. (1988) *Continuity and Change in Medieval Persia: Aspects of Administrative, Economic, and Social History, 11th-14th Century*, State University of New York Press, Albany.

Mahdavi, Shireen (1998) "Muhammad Baqir Majlisi, Family Values and the Safavids", in M. Mazzaoui (ed.) , *Safavid Iran and Her Neighbors*, University of Utah Press, Salt Lake City, 81-100.

Mathee, Rudi (2011) "From the battlefield to the harem: Did Women's seclusion increase from early to late Safavid times?", in Mitchell, Colin P. (ed.) , *New Perspectives on Safavid Iran: Empire and Society*, Routledge, London & New York, 97-120.

Nashat, Guity & Beck, Lois (eds.) (2003) *Women in Iran: From the Rise of Islam to 1800*, University of Illinois Press, Urbana & Chicago.

Newman, Andrew J. (2006) *Safavid Iran: Rebirth of a Persian Empire*, Tauris, London & New York.

Pārsādust, Manūchehr (2009) "Parikān Kānom", in *Encyclopaedia Iranica* (online) .

Peirce, Leslie P. (1993) *The Imperial Harem: Women and Sovereignty in the Ottoman Empire*, Oxford University Press, Oxford.

Quade-Reutter, Karin (2003) "...den sie haben einen unvollkommenen Verstand": *Herrschaftliche Damen im Grossraum Iran in der Mongolen- und Timuridenzeit (ca. 1250 – 1507)* , Shaker Verlag, Aachen.

Rizvi, Kishwar (2000) "Gendered Patronage: Women and Benevolence during the Early Safavid Empire", in D. Fairchild Rugles (ed.) , *Women, Patronage, and Self-Representation in Islamic Societies*, SUNY Press, Albany, 123-153.

Shireen, Mahdavi (1998) "Muhammad Baqir Majlisi, Family Values and the Safavids", in *Safavid Iran and Her Neighbors*, University of Utah Press, Salt Lake City, 81-100.

- Szuppe, Maria (1994) "La participation des femmes de la famille royale à l'exercice du pouvoir en Iran Safavide au XVI<sup>e</sup> siècle (première partie)", *Studia Iranica* 23, 211-258.
- (1995) "La participation des femmes de la famille royale à l'exercice du pouvoir en Iran Safavide au XVI<sup>e</sup> siècle (seconde partie)", *Studia Iranica* 24, 61-122.
- (1998) "The 'Jewels of Wonder': Learned Ladies and Princess politicians in the Provinces of Early Safavid Iran" in Hambly, G. R. G. (ed.), *Women in the Medieval Islamic World*, 325-47.
- (2003) "Status, Knowledge and Politics: Women in Sixteenth-Century Safavid Iran" in Nashat, Guiti & Beck, Lois (eds.), *Women in Iran*, 140-69.
- Zarinbakhsh, Fariba (1998) "Economic Activities of Safavid Women in the Shrine-City of Ardabil" in *Iranian Studies* 31:2, 247-61.
- 阿部尚史 (2015) 「ムスリム女性の婚資と相続分：イラン史研究からの視座」『世界史のなかの女性たち（アジア遊学186）』111-8.
- (2016) 「ムスリム女性の財産獲得：近代イラン有力者家族の婚姻と相続」水井万里子「ほか」（編）『女性から描く世界史：17～20世紀への新しいアプローチ』145-166.
- 小野浩 (2010) 「ディルシャード・ハトンとそのファルマーン：14世紀イランにおける女性の発令書」『女性歴史文化研究所紀要』18, 170-152.
- (2014) 「ベギム・ジャーン・ハトン・カラコユルルの発令書から」杉山正明（編）『続・ユーラシアの東西を眺める』53-65.
- 後藤裕加子 (2014) 「サファヴィー朝後期のシャーの移動と「統治の都」」『人文論究』64:2, 29-57.
- 後藤裕加子 (2018) 「サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業：カズウィーンのサアータアバードを事例として」『関西学院史学』45, 80-49.
- 平野豊 (2000) 「シャー・タフマースプ一世治下のサファヴィー朝宮廷のゴム、エスファハーン両都市との戦時協力関係：ハーネ・クーチの都市移送に関する事例研究（一）」『駿台史学』109, 1-34.
- 平野豊 (2009) 「エスマイル一世の遺言と母后タージールの政治的判断：サファヴィー朝初の王位継承を支えた二本の柱」『明大アジア史論集』13, 188-210.
- ブロー、デイヴィッド (2012) 『アッバース大王 現代イランの基礎を築いた苛烈なるシャー』中央公論新社

註

- (1) Hambly は現地語の研究を対象に含めていないが、イランでは一九七〇年代に Shīrīn Bayānī がガズナ朝時代を扱った Bayānī (1971)、およびモンゴル時代の女性を扱った単書 Bayānī (1974) を発表している。また Hambly も挙げてるように、社会経済史の分野では17世紀オスマン朝下の女性の法的活動を論じた先駆的な論文 Jennings (1975) がある。社会経済史分野の研究史は阿部 (2015) に最新状況が紹介されている。
- (2) 特にオスマン朝の女性史関連の研究の進展は著しいが、ここではベルシア語文化圏を対象とした日本の研究のみを紹介すると、女性の経済活動や資産運用についてはイル・ハーン朝末期以降の小野 (2010) および小野 (2014)、近代イランの阿部 (2015) および阿部 (2016) などが挙げられる。
- (3) イブン・バットゥータ『大旅行記 3 (東洋文庫 630)』平凡社、1998, 39.
- (4) モンゴル帝国領域では De Nicola (2017) と Broadbridge (2018) の二冊の単著が近年相次いで出版された。De Nicola (2017) の序文にはモンゴル支配期女性史研究の最新動向概観がある [De Nicola (2017), 5-9]。
- (5) 研究ノートという本稿の性格と紙幅の制限から、典拠となる史料は議論上の必要がない限り提示しない。典拠として挙げる参考文献で確認のついで。

- (6) Szuppe (1995), 76-89, 100-2; Chereghlou (2016); Fakaft (1967), 204-7; Babayan (1993), 91-99 などを参照。他にも、平野 (2009) は、タフマースプ一世の即位時の母后タージュル・ハヌムの役割を明らかにしている。
- (7) イスマーイール一世の母 Halma Begum は白羊朝王女で、タフマースプ一世の母、彼の息子たちイスマーイール二世とムハンマド・フダーバンダの母 Sultānū Begum までがトルコマン系。ハイル・アルニサー・ベグムは夫の第四代ムハンマド・フダーバンダ (在位一五七八―一五八七) を補佐して政治権力を行使したが、キジルバシュの反発を受けて殺害された [Szuppe (1994), 90-9]。
- (8) バリー・ハーン・ハヌムの母 Sultān Aqā Khānum はチェルケスの名家出身で、叔父 Shamkhal Khān Sultān もタフマースプ一世の高官として仕え、その娘は後のイスマーイール二世に嫁いだ [Szuppe (2003), 146-7]。ただ、当時はまだキジルバシュのコーカサス出身者への反発は強く、タフマースプ一世死後の後継者擁立時の混乱やバリー・ハーン・ハヌムの暗殺にもつながった。
- (9) アッバース一世の統治時代にはタジク系有力者との婚姻政策は継続されている。アッバース一世が即位後に正式に婚姻関係を結んだのは、タフマースプ一世の兄弟 Bahrām Mirzā の息子 Sultān Husain の娘 Aghlān Pashā Khānum、タフマースプ一世の息子 (父の兄弟) Sultān Mustauf Mirzā の娘 Mand 'Ulīyā Khānum、ロールの支配者の

姉妹（自身の兄 Hamza Mirzā の元妻）、ギーラーンの最後の支配者 Khān Ahmad Khān の娘（母は父王の姉妹で、従姉妹にあたる）Yakhān Begum で、それ以外にも一時婚などで多くのグルジア王族や地方王族の女性を娶った [Falsafi (1967), 171-2, 211-3]。六名の娘たちのうち、Shāhzāda Begum と Malik Nisā Begum はそれぞれ別のマシユハドのレザー廟のムタワッリーに、Zubaida Begum はサファヴィー王家の外戚集団シャイハーヴァンド系の近衛隊長 'Isā Khān に、Khān Aqā Begum と Shahr Bānū Begum はそれぞれマーザンダーランの元支配者のマルアシー家の別の成員に、Hawwā Begum はイスファハーンの有力サドルに嫁し、その死後はその甥に嫁いでいる [Falsafi (1967), 198, 200-2; Newmann (2006), 54]。五名の息子たちの母親は、長男の Muhammad Bāqir（第六代サフイー一世の父）の母はチュルク系系 [Falsafi (1967), 170]、夭折した次男 Hasan と四男 Ismā'īl および五男 Imām-Qulī の母は不明、三男 Sulṭān Muhammad の母はグルジア系 [Falsafi (1967), 185-6, 192]。なお娘たちのうち Zubaida Begum は、Babayān によればグルジア王族の Fakhr-i Jahān Begum を母に持つ [Babayān (1993), 93]。サフイー一世の娘 Maryam Begum の夫はサドルであったので、王女をタジク系有力者に嫁がせるといふ政策はその後も継続されたと思われる [Newmann (2006), 104-5]。

(10) サフイー一世の母 Dilālān Khānum はグルジア系

[Falsafi (1967), 184; Babae (2004), 104]、第七代アッバース二世の母は Āna Khānum はチュルク系系 [Newmann (2006), 81; Babae (2004), 161]、第八代スライマーンの母 Nakīfat Khānum はチュルク系系 [Newmann (2006), 93]、第九代スルタン・フサインの母については詳しいことは伝えられていない。なお、サフイー一世には、祖父アッバース一世に盲目にされた兄弟 Sulaimān がいたが、その母はイスマール二世の娘 [Falsafi (1967), 184]。また、スライマーンの兄弟 Hamza Mirzā の母はグルジア系 [シャルダン『ペルシア王スレイマーンの戴冠（東洋文庫749）』平凡社 (2006), 24]。

(11) 年代記はサフイー一世即位までの経緯に曖昧さを残すが、アッバース一世に盲目にされた息子 Imām-Qulī 娘 Zubayda Begum の息子 Sayyid Muhammad Khān の二名がサフイー以外の有力な後継候補となった [Babayān (1993), 91-5]。

(12) この際に殺害された王子たちにはアッバース一世の娘たち Zubaida Begum と Hawwā Begum の息子たちが含まれた。Zubaida Begum もこの時に殺害されたようである [Babayān (1993), 99; Chardin, Jean, *Voyages du Chevalier Chardin en Perse et autres lieux de l'Orient*, 10 vols., Paris (1811), VIII, 47-8; Olearius, Adam, *Vermehrte Neue Beschreibung der Moscovitischen und Persischen Reyse*, II, Schleswig (1656), 655]。Fertier は Hawwā Begum をトン

バース二世の姉妹としているが [Ferrier (1998) , 402]、シャルダンの記述から、彼女がアッバース一世の娘であることは確かである。

- (13) カズウィーン の王宮地区については後藤 (2018) 、イ  
スファハーン については Blake (1999) を参照。

- (14) Szuppe (1994) , 250; Muhammad Ma'sūm b. Ḥwājagī  
Iṣfahānī, *Khulāṣat al-siyar: Tārkh-i rūzgār-i Shāh Šāfi Šāfawī*, I.  
Aḥsār (ed.) , Tehran (1368) , 43, 126.

- (15) Falsafī が依拠する Olearius の数字はフランス語版。ド  
イン語版では数百 [Olearius (1656) , 649]°。

- (16) Chick, Herbert (tr.) , *A Chronicle of the Carmelitis in  
Persia: the Sāfāvids and the Papal Mission of the 17th and 18th  
centuries*, Tauris, London (2012) , 1, 409, 471.

- (17) Ibid., 48.

- (18) これらの称号の区別は前期は曖昧なので、アッバース  
一世期以降に女性の序列化が進展したものと思われる。な  
おアッバース一世時代からサフイー一世時代にハレムの女  
主人であったザイナブ・ベグムは、ペルシア語史料では  
mahd 'uliyā (高貴な揺籃の意味) と呼ばれている [Khulāṣat  
al-siyar, 43, 83, 291; Muhammad Yūsuf Wāliḥ Iṣfahānī, *Irān dar  
zabān-i Shāh Šāfi wa Shāh 'Abbās-i duwum* (1038-1071  
H.Q.) : *Khuld-i barīn*, M. R. Naṣrī (ed.) , Tehran (2001) ,  
310]°。

- (19) Chardin, VI, 13-4.

- (20) Floor (2007) , 171-5; Floor (2007) には一六世紀後半  
からの歴代のハレムの侍従長一覧がある [Floor (2007) ,  
172-3, Table II-1]°。Floor は Chulah 部族のみを特定部族と  
して挙げているが、その前の Ughū の三代も親子・兄弟に  
よる継承例である [Khuld-i barīn, 329; Muhammad Tāhir  
Wahīd Qazwīnī, *Tārkh-i jahān-ārā-yi 'Abbāsī*, S. M. M. Sādiq  
(ed.) , Tehran (2005) , 313-4]°。

- (21) 黒人宦官は名前の前にアーガー (agā) をつけて呼ば  
れ、白人宦官はアーガーまたはベグを名前の後ろにつけて  
呼ばれたとされる [Floor (2007) , 177]°。Floor は紹介して  
いないが、年代記内では黒人宦官長はホジヤ (khwāja) の  
称号をもち [Tārkh-i jahān-ārā, 323-4]°。

- (22) Minorsky, V., *Tadhkirat al-Mulūk: A Manual of Sāfāvid  
Administration*, Gibb Memorial Trust, Cambridge (1943, repr.  
1980) , 68; Floor (2007) , 302-6, 308-14]

- (23) サファヴィー朝前期については、Zarinebat-Shahr  
(1998) 以外にコムのファーターイマ廟への女性王族の寄進  
を扱った Rizvi (2006) があるが、後期については Blake  
(1998) が女性王族の建設活動例を紹介するものの、ムガ  
ル朝との比較が主眼で、事例もイスファハーンに限られる  
(Blake が扱っていない他の事例については Newman  
(2006) , 100 を参照)°。